

読書のすゝめ

その13 H 29 6 / 26

第157回芥川賞・直木賞候補作発表

(日本文学振興会主催)

20日付で発表された芥川賞候補は今村夏子さん(37)らの4作。候補作は戦後では最少という。直木賞候補には初ノミネートとなる佐藤正午さん(61)らの5作が入っています。選考会は7月19日に東京・築地の料亭「新喜楽」で開かれます。芥川賞は雑誌掲載作品なのですぐに読むことはできませんが、受賞後に出版された作品は図書館で購入したいと思えます。



【芥川賞】

- ▽今村夏子 「星の子」(小説トリッパー春号) 温又柔「真ん中の子どもたち」(すばる4月号)
- ▽沼田真佑 「影裏」(文学界5月号) 古川真人 「四時過ぎの船」(新潮6月号)

【直木賞】

- ▽木下昌輝 「敵の名は、宮本武蔵」(KADOKAWA)
- ▽佐藤巖太郎 「会津執権の栄誉」(文芸春秋)
- ▽佐藤正午 「月の満ち欠け」(岩波書店)
- ▽宮内悠介 「あとは野となれ大和撫子」(KADOKAWA)
- ▽柚木麻子 「BUTTER」(新潮社)

『BUTTER』
男たちから次々に金を奪った末、三件の殺害容疑で逮捕された女、梶井真奈子。世間を賑わせたのは、彼女の決して若くも美しくもない容姿だった。週刊誌で働く30代の女性記者・里佳は、梶井への取材を重ねるうち、欲望に忠実な彼女の言動に振り回されるようになっていく。木嶋佳苗事件の闇を巡り、著者の新境地を開く長編小説。



『あとは野となれ大和撫子』
身寄りがなかつたり、行き場所を失ってしまった少女達を後宮に集めて様々な教育を施していた中央アジアの小国アラルスタンの大統領が暗殺された。周辺諸国やテロリストとの争いを恐れた官僚たちが一斉に逃げ出し、舵取り役のいなくなってしまうアラルスタンを守るために後宮の少女達が立ち上がる。その中には紛争によって技術者の両親を失った日本人の少女がいた…。



『会津執権の栄誉』
四百年の長きにわたり会津を治めてきた芦名家。しかし十八代目当主が家臣の手にかかって殺されたことから男系の嫡流が断たれ、常陸の佐竹義重の二男、義広が婿養子として芦名家を継ぐことに決まった。血脈の正当性なき家督相続に動揺する、芦名家譜代の家臣たち。義広が引き連れてきた佐竹の家臣団との間に、激しい軋轢が生じる。揺れ動く芦名家に戦を仕掛けるのが、奥州統一を企てる伊達家の新当主、伊達政宗。身中に矛盾を抱えたまま、芦名氏は伊達氏との最終決戦、摺上原の戦いに至る。



『月の満ち欠け』
自分が命を落とすようなことがあったら、もういちど生まれ変わる。この娘が、いまは亡き我が子？いまは亡き妻？いまは亡き恋人？そうでないなら、はたしてこの子は何者なのか。さまよえる魂と数奇なる愛の物語。